

ぐるだいにニュース 第68号

日本グループ・ダイナミクス学会 会報

2026年冬号(2月17日発行)

発行所：大阪大学 三浦麻子研究室

E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp

編集担当：古谷嘉一郎(関西大学)・万静怡(関西大学)

目次

1. 第71回を振り返って	2
2. 第71回大会参加記	4
3. The 16th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology 参加記	6
4. 第71回大会ワークショップ「コラボ・リクエストの一步先へ」に登壇して	7
5. 2025年度優秀論文賞選考結果のご報告	9
6. 2025年度優秀学会発表賞選考結果のご報告	12
7. 三隅賞のご報告	18
8. 機関誌『実験社会心理学研究』について	18
9. 国際化支援について	19
10. コラボレーション支援助成について	20
11. 事務局からのお知らせ	21
12. 学会関係連絡先	22

1. 第71回を振り返って

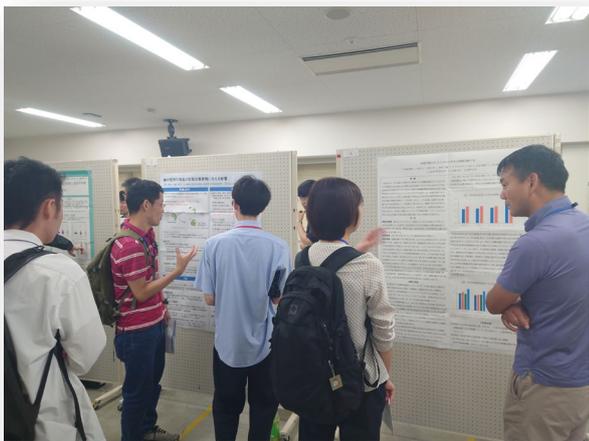
大会準備委員長 日比野 愛子

(東京科学大学 (10月～) / 弘前大学 (~9月))

会員の皆さま

2025年8月21日・22日に、日本グループ・ダイナミクス学会第71回大会を弘前大学にて開催いたしました。おかげさまで盛況のうちに、また大きなトラブルもなく終了することができました。地理的にはアクセスが少々難しい地域ですので参加いただける方が少ないのではと心配しておりましたが、最終的には140名の方に参加いただき、各種発表、懇親会とも大変にぎわいのある会となりました。

運営の傍ら会場を覗いていたところ、口頭、ポスター、ワークショップ、いずれも活発に議論が起こっていた様子が印象に残っています。グループ・ダイナミクス学会では中堅、ベテランの先生が口頭会場やポスター会場にまんべんなくいらしゃり、進行中の研究をご発表されているのが誰にとっても議論しやすい雰囲気を醸成しているのではないかと思います。特別講演では大坊郁夫先生よりグループ・ダイナミクスという領域の来し方行く末を照らしていただきました。また、コラボ・リクエスト企画WSでは学会の新しい活動の可能性を提示していただき、それぞれに示唆をいただきました。私自身も分野横断型の実験的な企画ができれば面白そうだと考えていたのですが、下に述べる理由で力及ばず・・・また別の機会に実現できたらと思います。



今回の大会運営について、弘前大学のスタッフは大会準備委員長の私と大会事務局長の古村健太郎先生の二人で進めてきました。二人とも学会運営は初心者というけっこう無茶な体制で、古村先生には多くのご尽力をいただいたことにあらためてお礼申し上げます。重要な締め切り——プログラム編成後の原稿提出等——のたびに焼肉会を設定し、慰労・鼓舞してきたことは楽しい思い出です。なぜか最後の打ち上げは焼き鳥となりました。今回の大会での有機的なプログラム編成、余裕を持ったタイムライン、絶妙な規模感の会場設定や会場間の動線は、すべて古村先生の優れた学会センスによるものです。

大会当日は、長峯聖人先生、田口恵也先生に手伝っていただきました。会場のトラブル対応や受付での細やかな対応には多種多様な能力が必要で、お二人がいなかったら本大会の運営は破綻していました。理事の先生方からのサポートにもあらためてお礼申し上げます。学会長の三浦麻子先生をは

はじめ、村上史郎先生、村山綾先生、古谷嘉一郎先生には広報はじめ特に多くのサポートをいただきました。

個人的な事情で恐縮ながら、私は2025年10月より東京科学大学に移りましたため、8月末の弘前大学での学会開催は、弘前での研究や教育を振り返りながらの活動となりました。実践を重視する、地域という対象をひとつくりにしない、対話とそこからの（unexpectedな）動きを楽しむグループ・ダイナミクスの視点を、弘前という土地、弘前大学という場で十分に養うことができたと思っています。

次回、第72回大会は鹿児島大会で開催される予定です。ぜひ多くの方にご参加いただき、さまざまな議論を展開いただけましたら幸いです。



2. 第71回大会参加記

澤海 崇文（流通経済大学）

弘前大学にて、2025年8月21日から22日にかけて開催された日本グループ・ダイナミクス学会第71回大会に参加してきました。いつもは何かしらの研究発表をねじ込んで参加していたのですが、今回は自分の研究発表無しで参加しました。本年度に初めて研究代表者として科研費基盤研究が採択されたこともあり、研究費の上で余裕があったので研究発表無しの状態で臨んでみました。以下、大会に参加しての感想を述べていきます。

自分は既に年齢的には中堅研究者ですが、これといった専門分野が確立しておらず、現所属（国際や観光系の学科）に着任してからはますます社会心理学から遠ざかっているように感じます。研究大会に参加するときは特定の分野を絞らず、プログラム集を眺めてみて興味を持った研究発表を見に行っています。今回は特にEnglish Sessionとポスター発表、そして特別講演に参加しました。English Sessionでは若手研究者の熱意に触れることができました。個別の発表について触れるのは避けませんが、若手（少なくともそう見える）研究者たちの発表を聞き、自分も大学院生の頃はこういうふうに関心を持って聞いていたのかなと懐かしんでいました。ポスター発表はいつもの通りの大盛況で、ちょうどいい規模感で安心してたくさんの質問をすることができ、発表者の探求心に大いに感銘を受けました。特別講演では大坊郁夫先生の深い洞察に満ちた講演を拝聴でき、対人関係やコミュニケーションをダイナミックに研究することの重要性を改めて認識することができました。講演後には司会の三浦麻子先生が大坊先生を「怪物」とポジティブな意味を込めて称したように、年齢に関係なくいまだに熱意を持って研究を続けていらっしゃる姿には深く感動しました。

日本心理学会や日本社会心理学会のような比較的大規模な学会だと密に発表者とやり取りするのが難しいのですが、本学会は大会参加者数がちょうど良く、同窓会のような雰囲気を感じます。自分は本学会入会から約20年経つのですが、時の流れの早さを感じました。この約20年間で運営体制も変わり、若手の参加率が増えたように思います。その結果、新しい視点やアイデアの流入、学会全体のモチベーションや活気アップにつながっているように感じます。

自分は前泊して青森駅近くに宿泊していましたが、学会前日に大雨や強風が東北北部を襲っていて、場所によって土砂崩れや電車運休といったことが起こっていました。暇があれば景観の美しい奥入瀬溪流にでも行こうかと思っていましたが、一部区間が通行止めになっていたようで、真面目に大会に参加しろ、との神のお告げだと感じました。このような悪天候、そして猛暑が続く日々でしたが、大会を成功裏に開催された日本グループ・ダイナミクス学会の関係者の皆様に心より感謝申し上げます。参加者一人ひとりが学びを深め、新たな繋がりを築くことができるよう、細部にまで配慮された運営に御礼申し上げます。次回の鹿児島大学での開催も楽しみにしております。



苫米地 飛（東京大学）

第 71 回日本グループ・ダイナミクス学会大会は、弘前大学にて開催されました。私にとっては、祖父の故郷が六戸ということもあり、幼少期に連れ回されて以来、久しぶりの青森県でした。北東北の晩夏らしい爽やかな空気の中、新たな研究との出会いに恵まれた 2 日間となりました。

本学会大会への参加は、今となっては検討の余地なくスケジュールに組み込まれているものの、初参加の時分には緊張したのを覚えています。私の学会デビューは本学会第 65 回大会でしたが、当時は台風が交通機関に甚大な被害をもたらしたため、初学会・初参加の不安と共に夜行バスで富山大学へと向かったのです。当時も、そして今大会も前日の悪天候にも関わらず、無事に会期を終えられたのは、関係者のみなさまの尽力によるものと思います。振り返ると、進学したての大学院生にとっては、所属学会を決めるのも一仕事ですが、本学会はそんな新人にも優しい場所でした。大学院生会員が多いこと、そして発表者と聴衆が互いに敬意をもって交流していること。安心の基盤を整えることに、本学会は尽くす手を惜しんでいません。それは、例年の総会においても繰り返し言及されている通りです。



私は今回、社会が市民のウェルビーイングを保障することについて人々がどのような認識を持っているかという、社会心理学と哲学・倫理学が関わる研究を発表しました。このテーマに取り組む過程では哲学者との議論を通じて、例えば「信念」という術語一つとっても、その含意が分野間で大きく異なるという問題に直面してきました。発表論文集をみれば明らかですが、本学会には分野横断的な研究に取り組まれている先生方が数多くいらっしゃいます。それゆえに、多様な興味関心を共有すること、異なる視点から意見をすることへの心理的な抵抗も少ないのだと感じます。実際、私の発表に対しても、自身の研究テーマとは異なる視点から多くのコメントをいただき、示唆に富んだ議論ができました。

私は今回、社会が市民のウェルビーイングを保障することについて人々がどのような認識を持っているかという、社会心理学と哲学・倫理学が関わる研究を発表しました。このテーマに取り組む過程では哲学者との議論を通じて、例えば「信念」という術語一つとっても、その含意が分野間で大きく異なるという問題に直面してきました。発表論文集をみれば明らかですが、本学会には分野横断的な研究に取り組まれている先生方が数多くいらっしゃいます。それゆえに、多様な興味関心を共有すること、異なる視点から意見をすることへの心理的な抵抗も少ないのだと感じます。実際、私の発表に対しても、自身の研究テーマとは異なる視点から多くのコメントをいただき、示唆に富んだ議論ができました。

本大会において特に印象深かったのは、特別講演における大坊郁夫先生のお話をはじめ、懇親会などの折に触れて諸先生方から伺った、本学会や日本のグループ・ダイナミクス研究の沿革に関する話題でした。先人たちが、グループ・ダイナミクスという学問体系を、いかにして日本の文化的土壌に根付かせ、独自の発展を促してきたか。そうした歴史的経緯に触れることは、私たちが当たり前のように享受しているこの研究環境が、決して自然発生的なものではなく、場を維持し改善してきた努力の上に成り立っているのだという事実を、改めて感じさせるものでした。こうした学会の歴史に思いを馳せる中で、最近読んだ『アフリカ哲学全史』（河野，2024）の内容が頭をよぎりました。同書は、アフリカにおける哲学のあり方をめぐる苦闘を描いており、言語・場所・人といったあらゆる面で独立した哲学の可能性を問う現代の議論がまとめられています。翻って、日本グループ・ダイナミクス学会という場において維持・継承されてきた「我々が我々の言葉で我々を語ることのできる環境」の重みを思うとともに、我々がこれから語るべきものについて考える機会となりました。

本大会の開催に尽力された準備委員会の皆様、そして刺激的な議論を交わして下さった参加者の皆様に心より感謝申し上げます。先達が築き上げてきたこの得難いコミュニティで、次回大会もまた皆様と議論できることを楽しみにしております。

3. The 16th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology(AASP 2025 マレーシア大会)参加記

原田 瑞穂 (名古屋大学)

2025年7月10日から12日にかけてマレーシアのモナシュ大学で開催された、The 16th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology (AASP 2025)に参加しました。本大会は私にとって初めての海外学会であり、海外の研究者と交流することへの楽しみと若干の不安がありました。そんな中、マレーシアに到着してからの移動に苦戦し、日付が変わってようやく宿泊先に着きました。こうした海外の洗礼を浴びたことで、大会への不安や自分の発表への緊張が高まり、その夜はなかなか寝付けなかったことを覚えています。しかし、いざ大会が始まると、こうした不安はいつの間にか消え去り、大会を楽しむことができました。会場では、国の垣根を超えた交流があちこちで見られ、活発な意見交換が行われていました。私自身も、多くの研究者との交流を通じて、自分の研究に限らず多くのことを学びました。



大会では、私はポスター発表を行いました。発表では、様々な地域の研究者から多くのコメントをいただきました。その中でも、文化的な視点からの解釈可能性や、得られた結果を踏まえたインプリケーションに関する議論を通じて、これまで気がつかなかった自分の研究の面白さを見出すことができました。発表準備の段階では、この研究を今後どのように展開させるかに悩んでいたために、本発表は私にとって大変貴重な機会となりました。また、本大会では多くのワークショップや講演が開催されました。特に、Keynote Speakerとして登壇されたJolanda Jetten氏(The University of Queensland, Australia)の講演では、経済的不平等によって引き起こされるグループ・ダイナミクスを明らかにするために取り組まれた一連の研究が紹介され、現実社会の一場面を切り取り、そこでみられる現象を実験的に検証することの難しさと奥深さを学ぶことができました。



AASPの魅力は、英語に不慣れでも海外の研究者と交流しやすい開かれた雰囲気にあると思います。大会中、私が自分の考えを英語で説明するのに時間がかかった際には、どの方も私の話を快く待って下さいました。そのおかげで、落ち着いて適切な言葉を選んで話すことができ、私の意図が相手に正しく伝わり、議論をスムーズに行うことができました。さらに、2日目に行われたBanquetでは、現地の食事を楽しみながら様々な地域の研究者と交流し、各地域で盛んに研究されているテーマやその背景を知ることができました。

私は今回のAASPへの参加を通じて、他の国際学会やワークショップにより一層興味を持つようになりました。海外学会に興味がある一方で英語での会話に苦手意識のある方にとっても、AASPは参加しやすい学会だと思います。次回のAASPは、2027年8

月にオーストラリアのケアンズで開催されます。そこでは、サマースクールなど本大会以外のイベントにも積極的に参加したいと考えています。

最後に、本大会の円滑な運営に尽力された先生方に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。本大会を通して得た学びや経験をもとに、今後も研究活動に取り組んでまいります。

4. 第71回大会ワークショップ 「コラボ・リクエストの一步先へ」に登壇して

酒井 智弘（ミイダス株式会社 HR サイエンス研究所）

第71回大会では、「コラボ・リクエストの一步先へ：コラボのつなぎ手について知る」のWSにて登壇の機会をいただき、誠にありがとうございました。会場では、学問領域や立場を超えたコラボレーションのかたちについて、多様な視点から議論が展開され、非常に刺激的な時間となりました。

ご一緒させていただいた岩本慧悟先生（株式会社ZENKIGEN）、相馬敏彦先生（広島大学）のお話も大変興味深く拝聴しました。岩本先生のご発表は、私の専門でもある人事領域と重なり、構造化面接による新たなアセスメント手法の開発に強く魅力を感じました。一方、相馬先生のご発表は、看護師である妻の姿や、私自身が関心を寄せている恋愛心理（出会いや選好）のテーマとも重なり、思わず引き込まれました。心理学研究には多彩なコラボレーションのかたちがあると改めて実感しました。

私の発表では、人材サービス企業の研究所に勤めている立場から、採用の課題を解決するために取り組んでいる研究活動を紹介させていただきました。私自身が今の仕事に出会ったのは、大学院時代にアントレプレナーシップに関するプログラムを受講したことがきっかけでした。心理学の知見をサービスやプロダクトに実装するニーズを探ろうと動き始めた当時は、正直よくわからないまま、好奇心に突き動かされて挑戦を重ねていた気がします。いま振り返ると、その中での企業との出会いや試行錯誤が貴重なキャリア形成の土台になっていると感じています。

弊社のサービスになっている「ミイダス コンピテンシー診断（特性診断）」は、私が現在の仕事で取り組んだ成果です。このアセスメントツールは、求職者の仕事におけるパーソナリティを測定し、働く人が組織で活躍する可能性を広げるために、求職者と求人企業との人材マッチングに活用しています。また、今後も研究を積み重ね、適性検査としての品質を高めていきます。転職活動中の自己分析に活用することもできますので、ご興味を持たれた方は一度受検してみてください（https://miidas.jp/landing/about_competency）。

さらに、弊社のHRサイエンス研究所は、心理学をはじめ、様々な社会科学領域の研究者が情報学領域の研究者と共に働き、成果を創出します。ご関心がある方はカジュアルに話ができますので、ご連絡ください。



今回の登壇をご依頼くださった石井敬子先生（名古屋大学）、正木郁太郎先生（東京女子大学）、そして大会運営にご尽力いただいた方々に、心より感謝申し上げます。ワークショップを通じての出会い、この会報を手にとってくださった方々とのつながりが、今後の新たなコラボレーションへと広がっていくことを願っています。「コラボ・リクエストのこれから」の一層の発展を祈念しつつ、私自身も引き続き挑戦を続けてまいります。

ミイダス株式会社 HR サイエンス研究所サイト：<https://careers.miidas.co.jp/science/>

岩本 慧悟（株式会社 ZENKIGEN、神戸大学）

今回、登壇の機会をいただきました岩本と申します。私は学部卒業後、求人広告企業で分析職として勤務しながら大学院に進学しました。その間に人材系シンクタンク等を経験し、現在は採用面接のコミュニケーションを解析する AI を開発するスタートアップの R&D 部門に所属しています。



WS では、企業・団体とどのようにうまくコラボするかという実践知と、社会心理学の専門性を持つ方のキャリアパスについて、フロアの先生方とも一緒に、だいぶ生々しく（？）議論されました。当日の様子は「SNS 投稿 NG」でしたので、このコラムでは詳細なレポートというよりは、WS の続きとしてキャリアパスについて考えていきたいと思います。

懇親会で個人的に印象的だったのは、「民間で社会心理学を活かすポジションは、思っていた以上に多様なのですね」という声でした。この言葉は、院生の方からもベテランの教員の方からも共通して聞かれました。そこで、私自身の経験や周囲の事例をもとに、代表的なパターンと特徴をいくつか紹介します。

第一に、大手通信系・メーカー系企業の研究所でのポジションです。業務としてアサインされるプロジェクトに加え、個人の研究テーマも追いやい環境が整っていることも多いです。研究の進め方は理工系の色が近い印象があります。学術的アウトプットと、そのインパクトが主な評価軸となります。

第二に、民間シンクタンクでのポジションです。広告業、金融業、人材業など幅広い業界に存在し、各企業にとって重要な社会・産業上のテーマを調査・分析し、ホワイトペーパー等の形で発信します。意思決定に必要な基礎データを集め、「現象」を切り取り、一定の示唆を提示することに強い動機づけがあります。社内評価では、メディア掲載や行政委員への参画など、対外的な影響力が重視される点が特徴です。

第三に、製品・サービス・社内施策に研究知を実装するポジションです。サーベイやアセスメントの開発、科学知や手法を UX に組み込む業務などが含まれます。研究の知見をどのように事業や組織の価値創出に結びつけるかが強く問われます。研究成果をプロダクト改善や意思決定の質向上といった形で価値として成立させる点に、このポジションならではの面白さがあります。

第四に、学術知や手法を活かしたコンサルティングとしてのポジションです。組織人事や政策のコンサルティングや、製品開発における使い心地の観点からのリサーチなどが代表例で、個人での活動に発展するケースも少なくありません。研究の力を意思決定支援という形に翻訳する力が、より直接的に求められます。

最後に、民間では社内で価値が認められれば比較的自由に動けるという特徴もお伝えしたいです。特に日本企業は職務の曖昧性が他国と比べても高いので、仕事やポジションを自分で「作る」ということもしやすいです。そういった可能性も含めて、民間というキャリアの選択肢も楽しんでもらえると思います。今後、民間の現場で社会心理学者が活躍する事例がより多く共有され、キャリアの選択肢が自然に広がっていくことを期待しています。もし私にお役に立てそうなことがあれば、いつでもお声がけください。

株式会社 ZENKIGEN サイト: <https://zenkigen.co.jp/>

5. 2025 年度優秀論文賞選考結果のご報告

「実験社会心理学研究」編集委員長
 常任理事 五十嵐 祐 (名古屋大学)

本年度の優秀論文賞の選考対象論文は、「実験社会心理学研究」第 64 巻 1 号及び 2 号に掲載された原著論文 5 編、展望論文 1 編、Short Note 4 編の計 10 編でした。これらの中から優秀と考えられる論文 3 編を選び、1 位から 3 位まで順位をつけて投票するよう、2025 年 7 月 31 日を締め切りとして編集委員にお願いしました。選考対象論文の著者である編集委員を除き、20 名の編集委員による投票が行われました。優秀論文賞選考規程に従って、1 位票 3 点、2 位票 2 点、3 位票 1 点として集計しました。その結果を基に、2025 年 8 月 18 日に優秀論文賞選考委員会を開催して協議を行い、下記 2 篇の論文に優秀論文賞を授与することに決定いたしました。

辻本 昌弘 (2025). 事例研究における事例の選択について 実験社会心理学研究, 64(2), 70-83.

<https://doi.org/10.2130/jjesp.2402> (原著)

崔 邱好・石井 敬子 (2025). セルフディスタンス研究: 文化心理学の観点からの展望 実験社会心理学研究, 64(2), 84-101. <https://doi.org/10.2130/jjesp.2405> (展望)

辻本論文は、事例研究における代表性への批判に対し、事例選択の基準を「極限的か」や「代表性があるか」ではなく「理論的意義」と「実践的意義」の観点から判断すべきという新たな枠組みを提示したものです。質的研究の一般化可能性について説得力のある論証を展開し、社会心理学を超えて広く社会科学の方法論に貢献する、今後の研究の発展に資する優れた論考として高く評価されました。

崔・石井論文は、セルフディスタンス研究を体系的にレビューし、従来の個人内過程中心の検討から文化・社会的な視点への展開の必要性を議論したものです。文化心理学的な知見を精査したうえで、個人の感情調節が文化・社会の規範維持にどう寄与するかというマイクロ・マクロ・ダイナミクスの視点を明確にし、東アジア研究の必要性など、今後の展望も示された点が高く評価されました。

辻本先生、崔先生、石井先生におかれましては、このたびの受賞、誠にありがとうございます。今後ますますのご活躍とご研究のご発展をお祈り申し上げます。

2025 年度優秀論文賞受賞者の声

辻本 昌弘 (2025). 事例研究における事例の選択について 実験社会心理学研究, 64(2), 70-83.
<https://doi.org/10.2130/jjesp.2402> (原著)

辻本 昌弘 (東北大学)

このたび優秀論文賞を授与していただきましたこと、身に余る名誉であり、大変光栄に存じます。

この論文の執筆にあたっては、幾人もの先生方から貴重な助言を頂きました。また査読者の先生方からも改善点を懇切丁寧にご指摘いただきました。諸先生のご支援がなければこのたびの受賞はなかったものと思います。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

唐突ではありますが、話は 30 年ほど前に遡ります。学生だった頃、ヘーゲルの『精神現象学』を耽読したことがありました。同書は魔訶不思議な魅力をもっていて、「宇宙の自己認識の旅路」を描いたものと思えました。同書を駆動する精神の弁証法運動は、まったくの誇大妄想のようでもあるのですが、弁証法に依らないと立論できないことが確かにあるんだ——と当時の私には思えました。とはいえ、めったなことでは弁証法を使ってはなりません。ここぞという時に使うべきものです。そして今回の論文は「ここぞという時」だと私には思えてしまった（妄想してしまった？）のです。

というわけで、今回の論文では弁証法的議論構成を採用しました。論文前半では、仮設した定義に依拠した論証により定番の論争を排却するのですが、論文後半では、仮設した定義そのものを自己批判的に卻けて、事例研究に対する理解の止揚を図りました。また、理論的意義・実践的意義がある事例を選択すべきとの前提から論証を出発させ、極限的な事例、代表性のある事例、知見一般化、個性記述と準拠枠、状況への着目といった重要論点を巡る道程をへて、理論的意義・実践的意義がある事例を選択すべきという（前提と同一の）結論に還帰してきます。これでは循環論法なのですが、重要論点を巡る道程をつうじて事例研究の論理を明晰化しました。

と、まあ、浅学菲才の身で偉そうなことを書いてしまいました。弁証法の専門家からみれば笑止千万の物言いに違いありません。若き日を思い出しながら書いた論文、いささか気取ったところのある論文ではありますが、それだけにかえて今回の受賞は私にとって感慨深いものがあります。これを機会にさらに研究を発展させたいと思います。このたびは誠にありがとうございました。



崔 邱好・石井 敬子 (2025). セルフディスタンシング研究：文化心理学の観点からの展望 実験
 社会心理学研究, 64(2), 84-101. <https://doi.org/10.2130/jjesp.2405> (展望)

崔 邱好 (名古屋大学)

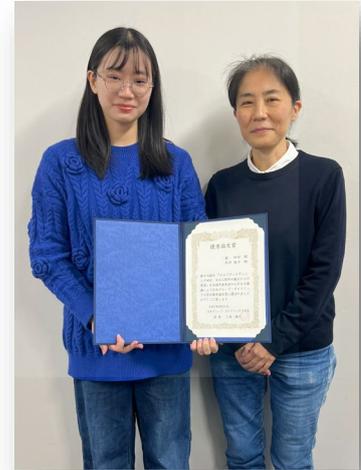
この度は、拙稿に優秀論文賞という栄えある賞を賜り、誠に光栄に存じます。選考委員の先生方ならびに関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

本論文は、出来事を想起する際に自己を一步引いた視点で捉え直すセルフディスタンシング (Kross et al., 2005) について、その理論的背景と実証研究の展開を整理し、文化心理学的観点を導入することの意義を論じた展望論文です。本論文の執筆は、自身の修士論文における実証研究での「つまづき」と、そこから生じた迷いに端を発しています。当時、日本人を対象に内省におけるセルフディスタンシングによるネガティブ感情の低減効果を検証しました。しかし、セルフディスタンシングの操作が期待通りに機能せず、文化的要因による影響に関する仮説もほぼ支持されませんでした。「なぜ操作がうまくいかないのか」、「それは文化の影響なのか」、「文化によってその効果や個人差がどこまで左右されるか」といった問いが生じました。

当初は、文化的視点の必要性を感じ、部分的に取り組んではいたものの、それを今後も継続的に掘り下げ、研究の主要テーマとして据えるべきかについては躊躇もありました。しかし、指導教員である石井敬子先生との議論を重ねる中で、セルフディスタンシングが自己観、思考法、内省様式といった、文化的に規定される心理過程と深く結びついていることを認識しました。そこでの気づきによって探るべき道が明確になり、本論文の問題意識と構成が形作られました。

論文の最後でも述べたように、今後はセルフディスタンシングを単なる個人の認知プロセスとしてだけでなく、社会規範の維持やそれに沿った道徳的判断との関連から捉えることも重要になると考えます。特に、セルフディスタンシングによる視点取得が、当該文化において「合理的」とみなされる規範や価値観と結びついているとすれば、人々がセルフディスタンシングを通じて、その文化が有する規範や価値を維持・再生産している可能性もあります。この問いへの探究は、個人と集団の相互作用を問う本学会の研究領域とも極めて親和性が高く、今後の学術的展開に寄与し得る重要な視座であると考えています。

最後になりますが、本論文の執筆にあたり、長きにわたり熱心なご指導と多大なるご支援をいただいた石井敬子先生に、深く感謝の意を表します。また、査読者の先生方からは、極めて建設的かつ示唆に富むご意見を数多くいただきました。特に、セルフディスタンシングと近似概念との差異の明確化や、今後の展望におけるマクロな視点の導入については、査読プロセスを通じて大いに洗練されました。今回の受賞を励みに、今後も文化と心の複雑な関係性の解明に向け、より一層の研究活動に邁進する所存です。



6. 2025 年度優秀学会発表賞選考結果のご報告

2025 年度優秀学会発表賞選考委員長
 村上 史朗（奈良大学）

2025 年 8 月 21 日～22 日に弘前大学で開催されたグループ・ダイナミクス学会第 71 回大会において、「2025 年度優秀学会発表賞」の選考が行われました。

審査過程は、優秀学会発表賞選考規程に沿って、以下の手順で進められました。

はじめに、論文集原稿を対象とした事前審査では、部門ごとに理事全員による投票が行われ、各部門上位 3 位までがノミネート発表として選出されました。

当日の二次審査では、理事 3 名の審査者がそれぞれのノミネート発表に参加して、内容とプレゼンテーションを各 5 点満点で採点しました。

最終的に、一次審査の投票数（1 票を 1 点とカウント）と二次審査の採点を加算する方法で、各部門で総合得点が最も高い発表を受賞候補者として、その候補者案について選考委員（理事）の承認を得て、最終的に受賞者を決定いたしました。

その結果、今年度の同賞は、以下の発表における第一発表者の方々に授与されることとなりました（敬称略）。

<ロング・スピーチ部門>

- ・ 第一発表者：李 葎理（大阪大学）
- ・ 発表題目：優遇された他者は攻撃されるのか？
 —相対的剥奪が階層の異なるターゲットの選好に与える影響—
- ・ 共同発表者：三浦 麻子

<ショート・スピーチ部門>

- ・ 第一発表者：黄 瑶（広島大学）
- ・ 発表題目：脆弱性の自己開示とパートナーの受容行動は関係を促進するか
 —D-SEM モデルによるペアデータの時系列解析—
- ・ 共同発表者：謝 新宇，相馬 敏彦
- ・ 第一発表者：柿本 航哉（東洋大学）
- ・ 発表題目：日本の高学歴者は階級特権情報に対して自己防衛的反応を示すのか
 —ベイズファクターを用いた実験的検討—
- ・ 共同発表者：北村 英哉

<English Session 部門>

- ・ 第一発表者：Rio Sumida (The University of Tokyo)
- ・ 発表題目：Harnessing regret for efficient learning:
 Effect of number of options and regret on learning outcomes
- ・ 共同発表者：Yuho Shimizu, Yukiko Muramoto

<ポスター発表部門>

- ・ 第一発表者：上田 寛（広島大学）
- ・ 発表題目：グループプロセスから集団認知行動療法の効果を捉え直す：
 統一プロトコル集団版(UP-G) のデータに対するマルチレベル分析の適用
- ・ 共同発表者：浅岡 聡，中島 健一郎

受賞者の皆様、おめでとうございます。受賞者は、受賞した内容に関する論文を第一著者として『実験社会心理学研究』に優先的に投稿する権利を有し、「特集論文」に準じて主査および副査1名で審査を受けることができます。ただし、投稿の権利は受賞発表日（2025年9月9日）から1年間に限って有効です。

2025年度優秀学会発表賞受賞者の声

<ロング・スピーチ部門>

優遇された他者は攻撃されるのか？

—相対的剥奪が階層の異なるターゲットの選好に与える影響—

李菴理（大阪大学）

このたびは名誉ある優秀学会発表賞にご選出いただき、誠に光栄に存じます。選考委員の先生方ならびに大会運営に携わってくださった皆さまに御礼申し上げます。

本発表では、相対的剥奪（他者との比較による「自分のほうが不利だ」という感覚）が、剥奪の原因となった相手への攻撃行動（直接攻撃）をどう左右するのかを、攻撃にコストが伴う状況で検討しました。現実には、不公平に怒りを感じても、相手を攻撃すれば自分が損をすることがあります。そこで本研究では、攻撃が割に合わない状況でも直接攻撃が生じるかに焦点を当てました。

実験課題では、3人のプレイヤーに社会階層（富豪・平民・貧民）のラベルを付し、参加者は常に平民としてゲームに参加します。途中で「ルール変更により特定のプレイヤーが優遇され、1位になる」というストーリーの提示（あり／なし）と、1位になるプレイヤーの階層（富豪／貧民）を操作し、ゲーム後の「攻撃対象の選択」で誰を標的に選ぶかを測定しました。1位のプレイヤーを攻撃すると自分の順位（および報酬）が不利になる利得構造を組み込み、直接攻撃に明確なコストを課しました。

本研究で特にこだわった点は、質問紙だけでは捉えにくい意思決定の過程を扱うために、オンラインゲームを模した実装を行ったことです。具体的には、クアルトリクス上でJavaScriptを用いて得点の推移や画面遷移を制御したり、学生を対象とした実験では、三人一組で同時に対戦している場面を自然にイメージできるよう、参加者募集の導線や時間枠の設定にも工夫を凝らしました。



結果としては、コストがある場面では、相対的剥奪を喚起するストーリーの有無にかかわらず、全体として直接攻撃は抑制されました。一方で条件によっては、利得最大化よりも「相手の勝利を阻止する」動機が示唆される反応も観察されました。「富豪」／「貧民」という階層ラベルの付与だけでもターゲット選好に差が生じた点は重要だと考えています。本研究をこのような形で評価していただいたことを誇りに思います。

発表後には多くの方に足を運んでいただき、多数のご質問・ご感想を頂戴しました。温かい反応に大変励まされました。今後も、相対的剥奪がどのような条件で「攻撃」として表れるのか、あるいは抑制されるのかを、より精緻に明らかにしていきたいと思っております。

最後に、本研究の構想段階から発表に至るまで、常に的確で本質的なご助言をくださった指導教員の三浦先生、研究設計や分析に至るまで具体的な提案を重ねてくださった仁科先生、そして日頃から議論に付き合ってくださいる社会心理学研究室のメンバーに、深く感謝申し上げます。

<ショートスピーチ部門>

脆弱性の自己開示とパートナーの受容行動は関係を促進するか
 —D-SEM モデルによるペアデータの時系列解析—

黄 瑤 (広島大学)

この度は大変名誉ある賞に選出いただき、大変光栄に存じます。審査委員の先生方、並びに発表当日貴重なご意見をくださった先生方に心から感謝申し上げます。この研究は親密な関係において、当事者が自分の脆弱性、つまり心の弱さをパートナーに露呈すると、二人の関係は縮まるかという問題意識に端を発するものです。

「ありのままの君でいいよ」、「本当の君を知りたい」といったセリフをドラマやアニメで見ると、「あっ、多分これからこの二人はもっと親密になるだろう」という展開が想像できます。特にラブコメではそうなるのは、もはや決まりみみたいなことで、相手の隠された弱みを発見することは相手との関係を一層親しくするための隠れたルールと言っても過言ではありません。では、現実の人間関係でも同じように進むのでしょうか。残念ながら、ラブコメと同じようにパートナーに自分が隠した「弱み」や「心配」などの脆弱性を開示しても、必ずしも、二人の絆はより強固になるではありません。むしろ、相手の無反応や距離をとるような態度で、開示した個人がもっと傷つく可能性もあります。しかし、脆弱性の自己開示には意味がないというわけではありません。



自己開示という行為は確かに、関係を深化、維持する機能をもっています。特に脆弱性の自己開示は、親密な関係の進展において特別な意味をもっています。成人の愛着理論によると、人は恋愛をすると、愛着対象であるパートナーを自分の「安全避難所」として、援助や安心感を求めようとします。そして、その安心感が満たされると、パートナーに対する愛着も強くなり、関係によりコミットするのかもしれませんが。脆弱性の開示をこのサイクルに当てはめると、援助を求める前段階でのシグナルになる可能性があります。そうすると、何が必要かは一目瞭然でしょう。開示を受けたパートナーが安心感を提供すること、つまり開示に対する受容行動が必要になります。

パートナーが受容行動を取ると、開示側の安心感が満たされ、愛着のサイクルが形成され、関係の絆が強化されるといえます。さらに、パートナー側も、「私がするのと同じように、相手もこうや

って支えてくれるだろう」と期待するようになり、二人が脆弱性を開示し合い、支え合うような愛着のサイクルが形成していく可能性があります。今後どのような開示がパートナーに伝わりやすいのか、どのような受容行動が一番有効なのかといった課題がまだまだたくさん残っており、さらに詳しく検討していきたいと思います。

最後に、未熟な自分であっても優しくご指導いただいた相馬先生と、今回の発表分析に貴重な意見をくださった謝先輩に改めて深く感謝を申し上げます。

<ショートスピーチ部門>

日本の高学歴者は階級特権情報に対して自己防衛的反応を示すのか
 —ベイズファクターを用いた実験的検討—

柿本 航哉 (東洋大学)

このたびは優秀学会発表賞という大変名誉な賞を頂戴し、心より感謝申し上げます。審査にあたってくださった先生方、また発表の際に貴重なご意見を賜った先生方に、深く御礼申し上げます。今回の受賞は、日頃から丁寧にご指導くださった北村英哉先生のお力添えがあってこそのものであり、この場を借りて心より感謝申し上げます。

本研究の着想は、私が修士課程で取り組んだ研究にさかのぼります。私は、社会階級や特権の問題、とりわけ上位階級者が自身の特権にどのように向き合うのかというテーマに強い関心を抱いてきました。欧米の先行研究では、特権を指摘された上位階級者が「自らの人生は困難だった」「努力してきた」と主張する自己防衛的反応を示すことが報告されています。しかし、日本社会でも同様の反応が生じるのか、文化差を踏まえるとどのようなパターンが見られるのかは十分に明らかになっていませんでした。修士論文では年収に注目して検討を行いました。参加者募集段階で上位階級性が顕著化してしまうなど、改善すべき課題も残りました。

そうした中、指導教員である北村先生が東京大学で非常勤講師を務められており、「日本の高学歴者を対象にした実験」を実施できるまたとない機会をいただきました。日本社会で上位階級として認識されやすい層にアプローチできる場は限られているため、この機会を活かしたいと強く思い、協力を得ながら実験を実施いたしました。今回の発表では、文化的背景を踏まえた特権情報の操作やメリトクラシー信念の測定、さらに効果の不在を積極的に評価するベイズファクターの活用など、修士論文での課題を踏まえて改善した研究デザインを採用しました。本大会は、率直に議論できるアットホームな雰囲気があり、今回もさまざまな方との対話を通して、自身の研究を深める大きな契機となりました。

本研究では、日本の高学歴者は特権情報を提示されても自己防衛的反応を示さないという、米国とは異なる反応パターンが示唆されました。今後は、なぜこのような差が生じるのか、その背景にある心理的メカニズムを明らかにしていく必要があります。人々が社会階層に関連する情報にどのように反応し、どのように自身の地位を捉え直しているのかといった動的なプロセスに着目した研究を進めることで、不平等や特権をめぐる理解が社会にどのように形成されていくのかという社会的意義の大きいテーマへと発展させていきたいと考えております。



<English Session 部門>

Harnessing regret for efficient learning:

Effect of number of options and regret on learning outcomes

Rio Sumida (The University of Tokyo)

この度は、名誉ある賞に選出いただき、誠に光栄に存じます。選考委員の先生方、大会運営に携わった方々、そして発表当日にお声がけくださった皆様に、心より感謝申し上げます。

今回の学会では、Englishセッションも発表者数含め例年以上に活発で、多くの方に成果を共有できたことは、大きな喜びとなりました。

今回発表させていただいた研究は、普遍的な感情である「後悔」を、教育現場で活用する可能性を探った縦断フィールド実験です。後悔は苦痛を伴いますが、未来の意思決定を改善する機能が注目されています。

私たちは、この知見を教育現場に応用するため、日本の2つの大学の授業内で選択式テストを用いた実験を実施しました。

研究の核となったのは、「選択肢の数」が後悔の強さに影響を与えるという点です。選択肢が少ない問題（2択）での誤答は、成功の可能性が高いと認識され、選択肢が多い問題（8択）での誤答よりも強い後悔を招きます。この僅差での失敗という認識は、ギャンブルなどではコミットメントを強める悪影響をもたらす現象です。一方で、本研究では、学習場面でテスト形式を工夫し、選択肢の数により失敗の惜しさを操作することで、後悔を次のテストに向けた学習動機づけを高める形で効率的な学習につながることを実証しました。

特に重要な発見は、学生の学習への初期コミットメントのレベルによって、この後悔の学習効果が異なるという点です。具体的には、初期の学習コミットメントが低い学生ほど、選択肢の数が少ない問題での失敗（2択）により強い後悔を感じ、この後悔がその後のモチベーションに大きく影響していました。これは、後悔の感情的インパクトが、低コミットメント層の学習を促すための重要なトリガーとなる可能性を示唆しています。集団内での学習コミットメントの多様性を考慮したテスト形式の設計が、後悔の学習効果を最大化するために重要です。

今回の研究は、実験室実験の知見を、現実の教育現場（フィールド）と融合させるという、私にとって研究手法の幅を広げる挑戦となりました。集団での縦断フィールド実験という時間と労力を要する取り組みが実現できたのは、共同研究者である清水佑輔先生の多大なるご協力と、長期的な実験に真剣に取り組んでくださった参加学生の皆様のおかげです。また、いつも多忙な中で、私が様々な研究に挑戦する姿勢を温かく見守り、指導して下さる村本由紀子先生に心より感謝申し上げます。



<ポスター発表部門>

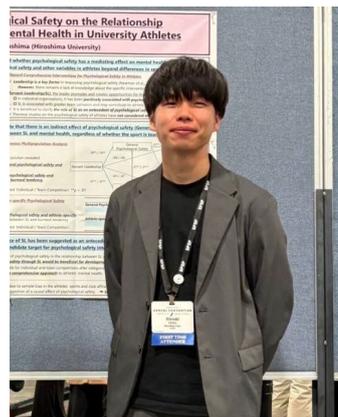
グループプロセスから集団認知行動療法の効果を捉え直す：

統一プロトコル集団版(UP-G)のデータに対するマルチレベル分析の適用

上田 寛 (広島大学)

この度は大変名誉ある賞をいただき、心より光栄に存じます。選考委員の先生方、大会運営にご尽力くださった先生方ならびにスタッフの皆様、そしてポスター会場に足を運んでくださった皆様に、深く御礼申し上げます。

本研究では、「グループプロセスから集団認知行動療法の効果を捉え直す」と銘打ち、臨床心理学領域の実証研究では十分に検討されてこなかったマルチレベル分析の適用に挑戦したものです。認知行動療法に限らず、集団心理療法において得られるデータは、少なからず個人と集団という階層を有しており、実際に集団特有の要因が治療効果に影響する可能性が指摘されています。しかし、その影響を適切に推定し、グループプロセスの観点から集団療法のより効果的な実施を目指す研究は、十分に行われてきませんでした。そこで本研究では、「集団内での症状類似性の知覚とその共有」というグループプロセスに着目し、マルチレベル構造方程式モデリング (ML-SEM) を用いて個人と集団のレベルを分離した分析を行いました。その結果、症状類似性の知覚が高い「集団」ほ



ど、治療終了時の不安症状が低いことが示唆されました。個人レベルに同様のパスが認められなかったことから、集団特有の要因が治療効果に及ぼす影響、そしてそれを直接的に検討することの重要性が示されたと考えられます。今後は、さらに多角的な集団要因の検討を進めるとともに、現場の支援者に対してより具体的な示唆を提供できる研究へと発展させていきたいと考えております。

本研究の着想は、私自身が精神科病院で集団認知行動療法に携わる中で、グループプロセスの影響を強く実感した経験に基づいています。約2年半にわたり運営に携わってきましたが、集団の様子は毎回異なり、開始から終了にかけても大きく変化を示します。こうした違いがどのように治療効果に影響するのか、また支援者はそれを踏まえてどのように患者とかわるべきかについて、科学的根拠に基づく示唆を得たいと考えました。これまで私は、科学者—実践家モデルに基づく研究活動と臨床実践の両立を志してきましたが、本研究を通じてその意義を改めて実感することができました。今回の受賞を励みとして、今後も幅広い現場に科学的知見を還元できるよう研鑽を積んでまいります。

最後になりますが、本研究は多くの方々のご尽力とご協力により形にすることができました。共同発表者の浅岡先生をはじめとした、こころホスピタル草津の同僚の皆様、研究にご協力いただいた患者様、そして共同発表者であり指導教員である中島先生に、改めて深く感謝申し上げます。この度は誠にありがとうございました。

7. 三隅賞のご報告

常任理事（渉外担当） 石井 敬子(名古屋大学)

三隅賞は、長きに渡って日本グループ・ダイナミクス学会の会長を務められ、アジアの社会心理学の発展に多大なる貢献をされた故・三隅二不二教授に敬意を表し、日本グループ・ダイナミクス学会とアジア社会心理学会が合同で設立したものです。本賞は、Asian Journal of Social Psychology 誌に掲載されたものを対象に、アジアの社会心理学に卓越した貢献をした優秀論文の著者に贈られます。AASP 2025 では、以下の論文が選出されました。またこの選考委員会は、現在、Asian Journal of Social Psychology 誌の Editor-in-Chief である新谷優先生（法政大学）を中心として構成され、本学会からは竹村幸祐先生（滋賀大学）および私が加わりました。

Bain, P.G., Bongiorno, R., Tinson, K., Heanue, A., Gómez, Á., Guan, Y., Lebedeva, N., Kashima, E., González, R., Chen, S. X., Blumen, S., & Kashima, Y. (2023). Worldviews about change: Their structure and their implications for understanding responses to sustainability, technology, and political change. *Asian Journal of Social Psychology*, 26, 504-535. <https://doi.org/10.1111/ajsp.12574>

Chen, X., & Hu, X. (2024). Crossing the rice-wheat border: Income, gender role attitudes and female subjective well-being. *Asian Journal of Social Psychology*, 27, 779-791. <https://doi.org/10.1111/ajsp.12637>

グルダイ学会三隅賞関連ページ: https://groupdynamics.gr.jp/award_misumi/

AASP Misumi Award : <https://asiansocialpsych.org/awards-and-scholarships/misumi-award/>

8. 機関誌『実験社会心理学研究』について

編集委員長 五十嵐祐 (名古屋大学)

副編集委員長 橋本博文 (大阪公立大学)

会員の皆さまによる積極的なご投稿と、審査にご尽力くださる方々のお力に支えられ、今号も読みごたえのある数々の論文をお届けすることができました。号を一つひとつ重ねるたびに、本誌が多くの方々の力によって成り立っていることを、あらためて実感いたします。

第65巻第2号には、原著論文2本、資料論文2本、Short Note 3本、書評1本を収載いたします。ご高覧いただけましたら幸いです。

今後とも『実験社会心理学研究』への変わらぬご支援をお願いいたします。

一般投稿論文

- ・原田瑞穂・五十嵐祐 間接互惠性における集団サイズの影響
- ・清水佑輔 高齢者ステレオタイプに反する情報の提示が高齢者への否定的態度や協力行動にもたらす効果

資料論文

- ・井奥智大・松木祐馬・岩谷舟真・田中晶子・湯山 祥・向井智哉・貞村真宏・綿村英一郎 一般市民による身体的・心理的虐待の認識・通告意図に関する要因
- ・相田直樹 協働学習の意見表明における評価予測と公的自己意識の関連

Short Note

- ・ Kazuya Iwata & Hiroshi Shimizu Do Chinese individuals prefer interdependence? Preference-expectation reversal in China
- ・ Meiyang Huang, Akiko Fukuda & Yuka Ozaki A longitudinal study of how mindsets influence motivation: Focusing on the interpretation of in-class feedback
- ・ Koya Kakimoto & Hideya Kitamura Do highly educated individuals in Japan exhibit self-defensive responses to evidence of class privilege? An investigation using Bayes factors

書評

- ・ 橋本博文 石井敬子(著)『文化神経科学』(2025年,勁草書房)

実験社会心理学研究(J-STAGE): <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjesp/-char/ja>

9. 国際化支援について

常任理事(渉外担当) 石井 敬子(名古屋大学)

国際学会発表支援制度について

2025年度は、前年度に引き続き、渡航費と参加費を支援の対象としました。選考委員会による審査の結果、2名の会員の渡航費、2名の会員の参加費をそれぞれ支援しました。本制度では、締め切りの時点で発表予定の研究だけではなく、すでに当該年度に学会発表を行った研究についても支援対象となります。また、他学会の支援制度との重複受給も可能です。詳細は以下のページをご参照ください。来年度に向けて、ぜひ皆様からのご応募をお待ちしています。

関連ページ: <https://groupdynamics.gr.jp/support/>

研究の国際化支援制度(英文校閲補助)について

この制度は、本学会会員の研究の国際化を支援するため、会員が自らの研究成果を英文誌に投稿する際の英文校閲代金の一部を補助するものです。今年度は未だ申し込みがない状況です。3月末まで引き続き募集を行っています。応募者の年齢制限はなく、複数論文の校閲費を合算して申請できます。また、過去に補助を受けた会員の方々も、当該年度以降に改めて申請することが可能です。詳細は以下のページをご参照ください。ぜひ皆様からのご応募をお待ちしています。

関連ページ: https://groupdynamics.gr.jp/support_international/

10. コラボレーション支援助成について

常任理事（渉外担当） 石井 敬子(名古屋大学)

本学会ではこれまでの年次大会における企画の1つとして、組織や団体と研究者が協働するような機会の創出を狙った「コラボ・リクエスト」を設けてきました。過去2年間は、コラボの機会を少しでも増やしていくために、研究者と現場の方々がかうまくマッチングできるような仕組みや方略を検討するコラボ・リクエストワーキングチームを結成し、そのメンバーが中心となってワークショップ（「コラボ・リクエストのこれまでとこれから：コラボにいたる路を知る」と「コラボ・リクエストのこれから：コラボの路を一步踏み出してみた」）を実施しました。そして第71回大会では、組織や団体と研究者が協働する新しい研究の創出に向けて、研究者としてのバックグラウンドを持ちながら実際に人材のマッチングに携わっている酒井智弘先生と岩本慧悟先生に登壇していただきました。相馬敏彦先生には、社会心理学の基礎的な知見を応用研究に活かす取り組みをしている研究者の立場から、組織や団体と研究者が協働していく上で不可欠な人的および社会資本について話題提供していただきました。

加えて昨年度から、コラボの機会拡張を支援するために、外部組織・団体・個人と関わるための費用を助成しています。昨年度は1件、今年度は2件助成いたしました。

（関連ページ：https://groupdynamics.gr.jp/support_collaboration/）

今後もコラボ・リクエストワーキングチーム内でコラボ推進に向けた後押しについて引き続き議論していきます。会員の皆様におかれましても、ぜひコラボレーション支援助成を有効活用していただき、組織や団体と協働していく機会を増やしていただきますよう、ご協力のほどお願い申し上げます。

コラボレーション支援助成活動報告：研究と実務をつなぐ異分野交流

梁 庭昌（金沢星稜大学）

このたび「学会員と外部団体・個人とのコラボレーション支援助成」を受け、超異分野学会・東京大会 2025 にて研究発表の機会をいただきました。本稿では、異なる分野が交わる場に参加したことで得られた気づきと学びについてご報告します。

私はこれまで、カスタマーレビューの投稿が投稿者自身の態度や記憶、さらには顧客経験そのものにどのような影響を与えるのか、といったクチコミによる効果を研究してきました。今回の発表は、こうした知見を実務へとつなげるために、企業との連携可能性や実証フィールドを探る試みとして位置づけています。発表では、Saying-Is-Believing (SIB) 効果を基盤に、カスタマーレビューが投稿者自身のホテル体験をどのように変容させるのかを、日本語 BERT による自然言語処理を用いて定量的に分析しました。その結果に基づき、観光・サービス産業における応用可能性を紹介しました。



超異分野学会は、研究者だけでなく企業、行政、教育機関など、多様な立場の参加者が集まり、専門の枠を越えて議論できる場です。実務視点を直接得られることが大きな特徴であり、今回の発表でも、さまざまな業界から率直で実践的なフィードバックを受けることができました。

とりわけ印象的だったのは、海外企業、とくにシンガポールのホスピタリティ企業から寄せられた高い関心です。「レビューを書くことでお客様の評価や気持ちは本当に変わるのか」「その変化を把握できれば現場のサービス改善に生かせるのではないか」といった、実務に直結する本質的な問いが投げかけられました。こうしたフィードバックにより、研究の社会的意義や応用可能性を改めて実感しました。

一方で、理論や専門用語を実務家にもわかりやすく伝える難しさも痛感しました。SIB効果のような心理学的概念を現場の文脈に翻訳し、サービス改善に活かせる形に落とし込む作業は、今後の大きな課題であるとともに、自分の研究を磨く貴重なプロセスでもあります。

今回の超異分野学会での経験を通じて、実務的なデータを用いて効果を実証し、その成果を現場へ還元することの重要性を改めて認識しました。こうした実務につながる研究を実現するためには、今回の学会で得られたつながりや共同研究の芽を継続的に育てていくことが欠かせません。実際、異なる専門領域の人々との交流は、多様な視点が交わることで新たな発想や展開を生み出す力を持つことを強く実感しました。今後もこのような異分野からの刺激を研究として確かな形に昇華させ、得られた知見を実務へ着実に還元できるよう取り組んでまいります。

II. 事務局からのお知らせ

常任理事（事務局担当） 村山 綾(立命館大学)

名誉会員の推戴について

浦光博先生を当学会の名誉会員として推戴することにつきまして、2025年8月の理事会、ならびに総会において承認されました。浦先生は、会長1期、常任理事1期、理事3期を務められました。これまでのご尽力に心から感謝申し上げますとともに、今後もひきつづき当学会にお力添えを賜りますこと厚く御礼申し上げます。

グループ・ダイナミクス事典について

2022年9月の年次総会において本学会の事業として承認され、編纂が進められてきた『グループ・ダイナミクス事典』が、このたび完成し、2026年2月3日に丸善出版より刊行されました。会員の皆様には、購入価格が10%割引となる特典がございます。お申込み方法につきましては、「『グループ・ダイナミクス事典』の発刊と会員購入割引のお知らせ」という件名でお送りしたメール、ならびに郵送にてお届けしたチラシをご参照ください。ぜひこの機会に購入をご検討くださいますよう、お願い申し上げます。



12. 学会関係連絡先

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等の変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどの配信先の登録・変更・停止等の連絡先として、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミクス学会 事務支局

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷(株)学会フォーラム内

TEL : 075-415-3661 FAX : 075-415-3662

E-mail : jgda@nacoss.com

学会運営・対外業務関連

日本グループ・ダイナミクス学会本部事務局

〒567-8570 大阪府茨木市岩倉町 2-15

立命館大学総合心理学部 村山綾研究室

E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

投稿論文・学会誌編集関連【論文投稿先・審査書類送付先】

日本グループ・ダイナミクス学会 編集事務局

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷(株)営業部編集校正課内

TEL : 075-441-3155 FAX : 075-417-2050

E-mail : jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp

広報関連【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへ記事投稿など】

〒569-2325 大阪府高槻市霊仙寺町 2-1-1

関西大学総合情報学部 古谷嘉一郎 研究室 (広報担当 常任理事)

E-mail : office@groupdynamics.gr.jp